

2. (3) 泉温、pH、溶存物質量の分布

(平成 30 年 3 月末現在)

1. 泉温の分布

温泉法では、泉温が 25℃以上又は定められた以上の物質を有するものを温泉としている。また、鉱泉分析法指針では泉温について次のように分類している。

		泉 温	
温泉	冷鉱泉	25℃未満	
	低温泉	25℃以上 34℃未満	
		温 泉	34℃以上 42℃未満
		高温泉	42℃以上

本県における温泉の泉温分布は、別紙の富山県温泉源泉地図のようになる。高温泉（42℃以上）は黒部峡谷や立山地獄谷周辺、富山平野、氷見地域などに広く分布しており、全源泉数 178 箇所中 64 箇所（36%）である。

特に黒部峡谷沿いの温泉には 70℃以上のものが多く、最も高温なのは黒薙温泉（No. 104）及び宇奈月温泉（No. 105）の 98.3℃である。また、最近では 1,200～2,000 m の大深度掘削により平野部を中心に高温泉が増加している。

2. pH の分布

鉱泉分析法指針では、pH について次のように分類している。

酸	性	pH 3 未満
弱	酸 性	pH 3 以上 6 未満
中	性	pH 6 以上 7.5 未満
弱	アルカリ性	pH 7.5 以上 8.5 未満
アルカリ性		pH 8.5 以上

本県における温泉では、酸性及び弱酸性を示す源泉はわずか 9 箇所、全源泉数に対する割合は 5% である。それらのうち、最も pH が低いのは地獄谷温泉（No. 311）の 1.9 である。また、黒部峡谷の人見平温泉（No. 110）や仙人湯温泉（No. 111）、林道温泉 1～3 号（No. 719～721）は弱酸性である。これら酸性泉の原因物質は、立山地獄谷や黒部峡谷では硫酸、林道温泉では遊離二酸化炭素である。

一方、アルカリ性及び弱アルカリ性を示す源泉は 118 箇所、全源泉数に対する割合は 66% である。このうち、アルカリ性泉は 42 箇所、全源泉数に対する割合は 24% である。最も pH が高いのは亀谷温泉（No. 950）の 9.9、ついで粟巢野温泉（No. 949）の 9.8 である。これらのアルカリ性泉の原因物質は炭酸ナトリウムである。また、弱アルカリ性泉は 77 箇所とこの分類の中では最も多く、全源泉数に対する割合は 43% を占める。弱アルカリ性の原因物質は炭酸水素ナトリウムである。

3. 溶存物質量の分布

本県における温泉では、溶存物質量が 1 g/kg 以上の源泉は 108 箇所、全源泉中 61% を占める。特に 10g/kg 以上の温泉は 20 箇所、全源泉中 11% となっている。

最も溶存物質量の多い温泉は新湊温泉 (No. 503) の 29.55g/kg、ついで雨晴温泉 (No. 401) の 29.2g/kg、氷見天然温泉「しおさいの湯」(No. 612) の 26.71g/kg である。なお、溶存物質量の多い (5 g/kg 以上) 温泉は化石海水が主体となっている。